**週刊やすいゆたか再刊20号16年４月７日**

**孫に語る日本国の建国物語**

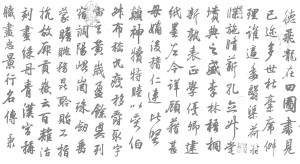
**11．神武東征は一豪族の東征か？**

絵里:神武天皇つまり磐余彦大王が東征して、饒速日王国を倒し、大和政権を樹立したという話は単なる神話にすぎないのか、それとも史実を反映しているのか未だに決着していないらしいわね。もっとも辛酉革命説にもとづいて紀元前660年に即位したという説は、歴史の偽造の典型だけれど、筑紫勢力が東征して政権を樹立するというのは大いに有り得るということね。饒速日王国が史実としてあったら、それを倒した磐余彦の東征もあって可怪しくないわけでしょう。

弘嗣:磐余彦の東征が作り話としたら、磐余彦に東征された饒速日王国の存在も、磐余彦の東征物語によって創作された存在ということになるでしょう。そうすると大国主の大国形成や国譲りの話なども、同じ論理で全部後世の創作に成ってしまうの？

絵 里:存在を裏付ける遺跡や出土物、同時代の文字史料などが出てこないと、史実だと確定できないのよ。ただ物語として矛盾が少ないと、それが史実であったのではないかと納得してもいいのじゃないかというのが、今までのお爺ちゃんの「歴史を見るメガネ」の説明になっているの。

王羲之の鍾繇千字文  
王仁が伝えたとしたらこれ

[](http://www46.atpages.jp/mzprometheus/wp-content/uploads/2016/03/shouyousenjimon.jpg)やすい:絵里ちゃん、飲み込みがいいねえ、そういうことなんだ。倭人は何故か文字を本格的に使用しようとはなかなかしなかった。その理由はよくわからないけれど、ほとんど同時代の文字史料が出てこない。五世紀には王仁が『千字文』『論語』を伝えたとか、鏡や刀剣に文字が刻まれていてもそこから、歴史が見える ところまでは書かれていない。つまり文字で歴史を論じたり、物事を論じたりするところまでいっていないんだ。

六世紀になって仏教公伝で経典を講読し、理解する必要が生じて、はじめて漢字が本格的に使用される。それでも歴史伝承や神話などはあくまで語り部による口誦伝承に限られていたわけだ。聖徳太子が亡くなる直前に『天皇記』『国記』を記されたことになっているが、歴史の文字記録がそこから出発したと言っていい。だから七世紀までの歴史を史実として実証的に確定できるというのは、研究者の思い上がった議論なんだよ。

弘嗣:つまり古い時代のことは科学的に歴史として実証できないから、歴史物語として受け止めるしかないということ。それじゃどの解釈が正しいかなんて論じても仕方ないことにならない？

絵里:それはそうじゃないでしょう。矛盾だらけの説や、自分の好みや願望で解釈したりすると次々ボロが出て説得力がなくなってしまうのよ。だから限られた現存する歴史書や史料、考古学的遺物などからできるだけ、矛盾を精査して論理一貫した誰もが納得できる歴史物語を紡いでいくのが、大切だということね。

やすい:絵里ちゃんに同感だな。それで神武東征があったか、それともなかったかの判断だが、紀元前660年は辛酉革命説でデッチ上げたことなのでダメだとし ても、東征した勢力が大和政権を樹立したことは十分考えられるわけだ。それでも二代目から九代目の記紀の記述はほとんどないので、歴史を古くみせるための創作ではないかということで、欠史８代と呼ばれている。

弘嗣:でも何しろ古い時代だから伝承が初代の建国王のようには残らなくても当然だといえるね。それに歴史を古く見せるための細工として、年齢を二倍近くサバを読んでいるようなので、欠史８代だっていなかったとは断言できないでしょう。もちろん居たことも証明できないけれど。

絵里:そういう場合に、科学的であることを表看板にする実証史学では、いた証拠、あった証拠がないのならいなかったこと、なかったコトにしましょうとなりがちなのね。でも歴史の場合に流れとかつながりとかが大切だから、歴史が消しゴムで消されちゃうとぶつ切れ状態になって、歴史が見えなくなってしまうということね。そこでお爺ちゃんとしては、よく矛盾点を精査して、改変されているところを見つけ出し、元の形を復元しながら、歴史の原像に迫っていくしかないということね。

やすい:それで磐余彦の東征だけれど、饒速日王国が再建された時に、親の仇をとってやったのに、恩をアダで報いて撃退された武御雷軍は、饒速日王国に対して激しい遺恨を抱いていたと思われるね。いずれ機会があれば饒速日王国を倒してやろうと身構えていたわけだ。だから磐余彦が東征して難波に政権を樹立したいと申し出た時に高天原の高御産巣日神は支援してやろうということになったわけだ。  
  
絵里:ちょっと待って、高御産巣日神が武御雷軍を極秘裏に訓練して奇襲させてたって言ってたでしょう、それから一世紀近く経っているはずなのに、また高御産巣日神が出てくるとは超長生きということにならない？

やすい:高御産巣日神というのは家柄の名称になっているんで、代々引き継がれていると解釈すべきだろう。そのことを記紀などは断っていないので誤解されやすいね。

弘嗣:しかし筑紫倭国が大和・河内倭国を東征して併合すれば、大八洲が統合されて、海原や高天原が飲み込まれてしまうということで、それで出雲帝国を止めたのに、今度は筑紫倭国が大八洲統合すれば。これも大国形成だから、それこそ高天原は吸収されてしまうでしょう？

絵里:だから筑紫倭国全体が大和に移って、大和政権になったのじゃなくって、磐余彦東征は筑紫の一地方豪族の東征だという解釈なのよ。磐余彦一族は一応筑紫王家の血統なのだけれど、分家で日向の豪族だったの、筑紫にいても大王にはなれないから、東征して饒速日王国を打倒し、大和政権を樹立しようとしたわけ。

弘嗣:なるほど、でも一豪族が饒速日王国を倒せるという仮定に無理はないの？そもそも磐余彦が一豪族出身にすぎないことは証明できるの？

やすい:もし筑紫倭国が一丸となって東征したとしたら、かなりの大軍が動くから、長期間かけては食糧の調達などが難しくなる。『古事記』では瀬戸内の各地に拠点を移しながら、次第に各地を制覇して、戦備を整え、16年かけてやっと浪速に到達している。大軍でこれだけ期間がかかると食糧は尽きるし、現地調達するにも大変だ。さすがに『日本書紀』では３年で浪速に到達したことに修正している。ところが東征軍が一地方豪族だとしたら、各地で制覇して、兵員や戦備を増強しながら次第に浪速に近づいていくのが現実的だ。一地方豪族だったのが浪速につくころには巨大軍団に膨れ上がっていたということだから。饒速日王国も倒せないことはないということなんだ。

[](http://www46.atpages.jp/mzprometheus/wp-content/uploads/2016/03/konohanasakuya.jpg)それに一地方豪族に過ぎなかつたことは邇邇藝命から磐余彦命までの血統の説明を読めば、磐余彦一族は地方豪族に過ぎなかったことがはっきりするよ。

堂本印象画「木花開耶姫」

絵里:紀元10年頃となっているけれど、邇邇藝命は鹿児島県か宮崎県かはっきりしないけれど、笠沙の岬で美しい木花咲耶比売を見初めて求婚したのだけれど、本人はそんなことは父に言って、父から返事をもらってくださいと返事したのね。すると父の大山津見神は、姉の磐長姫も一緒にもらってくださいとあまり別嬪でない姉も一緒に差し出されたものだから、邇邇藝命は姉の方は相手にせず、「君は帰っていいよ」と言って、妹とだけ結ばれたわけ。それで地元の神楽などでは、姉は自分の顔を鏡で見て、悲観して自殺したことになっているそうよ。

やすい:お父さんは決して何とか姉も縁付けようとしてしたのではなく、木花咲耶は美しい花だけれど、すぐに散ってしまう。それに対して磐長姫は何時迄も生き続けることができるのだ。だから大王の長寿を願って磐長姫を差し出したのに、受け取らないということは、大王にはお気の毒だが、長寿は望めないということだな。これが大王家は長寿ではなくなった原因だというんだが。

絵里:東南アジアではバナナと石説話があって、バナナをとったら美味しいけれど腐るので寿命は有限で、石を取ったら不老長寿なんだけれど人はバナナを食糧に選んだので寿命が短いという話と同類ですね。だから実証史家は、東南アジアの説話由来だから創作だと史実でないとしますね。

やすい:もちろん史実でないけれど、邇邇藝命が地方で見初めた女性と一夜の契りを結んだけれど、その時に親がいろいろ出しゃばって気分を害したので、その女性ともそれっきりになってしまったということはありそうな話だろう。

[](http://www46.atpages.jp/mzprometheus/wp-content/uploads/2016/03/ubuya.jpg)弘嗣:一夜きりなのに木之花咲耶比売は大王の子が出来ましたと言って、大きなお腹を抱えて押しかけてきたのでしょう。さあ困った、邇邇藝命どうする、どうするですね。

絵里:こら、中学生のくせにませたこと言って、王子が生まれるとなったら私事じゃないからっといって、宮中で産みたいということでしょう。ちゃんと責任とってよと大王に迫ったのですね。なかなかやるじゃない。

弘嗣:でもホントに困まるよね。その夜のことしか相手のことは知らないわけだから、本当に自分の子かどうかわからない。一夜妻にされたことを恨んで、近辺の 若者の子を宿して王子にし、王権を狙っているのかもしれないわけで、対応次第では王権を乗っ取られるかもしれない重大問題じゃない？

産屋炎上

やすい:さすが弘君、問題の本質を捉えているね。だから邇邇藝命は一夜の契りだから信じられないと突っぱねたんだ。そしたら産屋を炎上させてその中で子を産 むから。無事に生めたら認知してくださいと言ったんだ。熱湯に手をつけさせて、爛れなかったら無実だとする審判の仕方があったんだ、なんというか知ってる？

絵里:盟神探湯（くがたち)でしょう。まあその一種ね。でも凄い度胸だわ。下手したら母子ともに死んじゃいますからね。そうやって命を張って認知を迫られたので、大事になってはまずいと考えて、認知したのか、それとも見事に火遁の術を用いたのか、いずれにせよ認知をせざるを得なかったのね。

弘嗣:そしたらその段階で万世一系は途切れていた可能性もあるんだね。別に現代では血筋がどうのということはどうでもいいけれども。

やすい:だから騙されて王家を乗っ取られると大変だから、認知はしたものの、宮殿に住んで王位継承権をもった王子として育てられたのではないんだ。母方の大山津見神に育てられ、地方豪族として育ったのだ。

絵里:火の勢いが盛んなときに生まれたのが火照命(ほでりのみこと)、鎮まりかけたときが火闌降命(ほすせりのみこと)、弱くなって生まれたのが火遠理命 (ほおりのみこと)ね。長男は海で漁猟をして暮らしたので海幸彦と呼ばれ、三男は山で狩猟をして暮らしたので山幸彦と呼ばれていたの。だから豪族ではあっても王族ではないだろうという解釈ね。その解釈はどうかな、韓流時代劇でも王族で狩猟好きがよく出てくるわ。

弘嗣:それでも王宮で育ったような記述はないのは確かだよ。まさか一夜妻の子を王子として待遇して、もし違っていたら大変だから、地方豪族として優遇しても、王子扱いではなかったのじゃないかな。

やすい:まあ他にもたくさん各地に子を設けていたかもしれないから、宮中にいる正室や側室の子がいなくなったら、王位継承もあり得たかもしれないけれど。ただ、磐余彦大王の血統の話しか残っていないので、邇邇藝大王の次は誰が大王になったか全く分からないのが実情だ。

絵里:四世紀初め頃に熊曾に筑紫倭国は滅ぼされてしまったのでしょう。その時に語り部もみんな死んでしまったようだから、伝承は磐余彦の血統の話しかないというわけね。

弘嗣:それでさ、海幸彦と山幸彦が一日だけ仕事を交替する話になって、慣れないものだからちっとも獲物がない、そればかりか山幸彦は兄から借りた大切は釣り 針をなくしてしまい、刀を鋳つぶしたりして代わりのを返すのだが、全く気に入られなくて、それでとうとう家出してしまう。

[](http://www46.atpages.jp/mzprometheus/wp-content/uploads/2016/03/watatsumino.jpg)青木繁「わたつみのいろこの宮」

それで塩椎神（しおづちのかみ）の船で竜宮城みた

いなところ海の神の綿津見の宮へいったんだ。そこで豊玉比売と出会って、お互いに一目惚れして結婚し、そこで夢の様な三年間を過ごし、ふとどうして此処にやって来たか考えると釣り針を探していた事に気づき、綿津見の神に相談すると魚を集めて調べてもらい、赤い 鯛に刺さっていた釣針を見つけて、戻ることになった。それで潮満珠と塩乾珠(しおふるたま)を授かり、兄が攻めてきたら潮満珠で溺れさせ、許しを請うたら 塩乾珠で助けなさいと言われた。それを何度も繰り返してとうとう兄は降参して弟に事えるようになったというお話です。こういうお伽話と史実は関連するのかな。

絵里:要するに邇邇藝命は、高天原からやって来た天神の子ということになっているので、大八洲で王として治めていくには、国つ神とふれあい、その智慧やパワーを貰わないといけないわけ。山幸彦は兄とのトラブルから国つ神と深く交流し、その力を得たので、兄とのトラブルに勝って、権力を手に入れて国を発展させたということを示しているのでしょう。

弘嗣:それだったら筑紫倭国の王になっていたみたいじゃないか、お爺ちゃんの解釈だとあくまでも地方豪族の中での話だろう。釣針にこだわるのも暮らしがかかっているからなんだ。それはともかく、紀元35年頃豊玉比売が妊娠したといってやって来て産屋を作って子を生むわけだ。こんどは「見ちゃダメよ」という パターンなんだな。伊邪那岐命が伊邪那美命を黄泉の国に迎えに行って「見ちゃダメ」と言われて、つい見てしまうと、恐ろしい光景だったので逃げ出したのと 似ているね。

絵里:それより「鶴の恩返し」に似ているわ。鶴がおじいさんに恩返しで自分の綺麗な羽を使って反物を追っている姿を「見ちゃダメ」と言われているのにみてしまったので、居なくなってしまう話ね。ともかくお産の時には元の姿に戻るというわけで、豊玉比売はワニになっていたということね。それで生まれたのが鵜草葺不合命よ。産室を完成させるのが間に合わなかったからそういう名前になったらしいわ。

やすい:それで豊玉比売は戻らなくてはならなかったので、妹の玉依比売を養育係として寄こしたんだ。まあ母親代わりだな。それで鵜草葺不合命は玉依比売と懇ろになって生まれたのが磐余彦の兄弟なんだ。  
　磐余彦誕生は紀元70年頃かな、山幸彦が綿津見の宮に着くように船を用意してくれたのも塩椎神だが、彼は磐余彦兄弟とも関わりが深くて、浪速には饒速日王国がある話までしてくれている。塩椎神は製塩などもしていただろうが、瀬戸内の水運にも詳しい。恐らく海原倭国の有力者だろう。

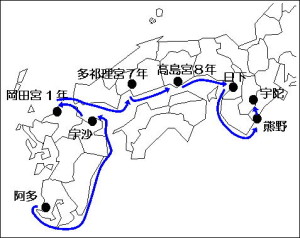
絵里:そこで高千穂宮で東征計画を建てているわ。しかも磐余彦は15歳で兄たちを差し置いて皇太子になっているじゃない。これでは地方豪族だというお爺ちゃんの決め付けは通用しないかも。

や すい:『日本書紀』に「天皇、生れながらに明達し、意、石霍く如くます。年、十五にして立ちて太子と爲す。長りて日向國吾田邑吾平津媛を娶き、妃となす。」とあるけれど、これは東征の経緯を見ていると、兄たちが戦死したりして生き残りで帝位についたようにも解釈できるので、あまり15歳で立太子は信用できないね。

そして『古事記』では「神倭伊波禮毘古命、その伊呂兄(いろせ)五瀬命の二柱、高千穗宮に坐して議りて云ふ「何地(いづく)に坐(ま)せば[者]や天下の政(まつりごと)を平(たひら)げ聞看(きこしめ)す。なほ東(ひむがし)へ行かむと思ほす」と。この高千穂宮 というのは、邇邇藝命が天空の国高天原から降り立ったから高千穂峰なので、それは祖母の月讀命の海降りを孫の代にずらしたものだよ。だから高千穂峰の天降 りや、高千穂宮という発想も五世紀以降の発想だよ。高千穂宮で語り合ったということはあり得ないな。ただその時筑紫倭国の王宮がどこだか分からないが、王宮にこの兄弟が兵士か何かで宮仕えしていて、話し合ったことは有り得る話だな。

弘 嗣:つまり筑紫にいても天下に号令する大王には成れないので、東の方に行って自分たちの政権を樹立しようよという相談だよね。そして『日本書紀』では塩椎 神から「東には美しい土地があり、靑山が四方を取り囲んでいる。その中にまた天磐船に乗って天降った者がいる」と聞かされているんだ。それで磐余彦は「そ の土地は、必ず以て大業（あまつひつぎ）恢弘（ひらきの）べて、天下に光宅（みちを）るに足りぬべし」と言ってるのだけどどういう意味なの。

磐余彦東征経路図

[](http://www46.atpages.jp/mzprometheus/wp-content/uploads/2016/03/jinmutoseizu.jpg)絵里:つまり浪速、あるいは河内・大和の土地ね、その土地は天津日継だから天照大神から与えられ、引き継いだ人民を治め安んじるという大きな業(わざ)を広く行き渡らせて、天下が喜びに輝くようにできるだろう」というような意味でしょうね。というのは次に「蓋（けだ）し六合（くに）の中心（もなか）か。」とあるので畿内が大八洲の真ん中だという意識があるわけよ。これは『日本書紀』が書かれた頃の意識かもしれないわね。だって筑紫倭国の一豪族だったとしたら、大八洲全体を統合するのにその中心にあたる畿内に都するのがいいということにはなりませんからね。「その飛び降るという者は、これ饒速日（にぎはやひ）と謂うか。何ぞ就（ゆ）きて都つくらざらむ」となっているわ。「天降ったのは饒速日というらしい、どうして東に行って都を作らないことがあろうか」という意味ね。

やすい:『古事記』や『日本書紀』は奈良時代に編纂されたので、中心は大和で日本全土を統合する統一国家が国家の理念だ。そういう国家が磐余彦大王の東征で原型が出来たことにしているんだよ。でも磐余彦の出自を考えると、どうも邇邇藝命の一夜妻の子の孫にあたり、地方豪族だったので、筑紫にいたのでは天下に号令できない、だから東にいって政権を建てようという目標を建てたんだ。それは海原倭国の有力者と思われる塩椎神から饒速日王国の存在を聞かされていて、 大王に成りたければ、浪速を攻め取ればいい、饒速日王国には恩を仇で返された恨みがあるから、高天原の高御産巣日神も応援してくださるだろうと聞かされていたからだろうな。

弘嗣:要するにお爺ちゃんの言いたいことは、記紀は天照大神の直系の子孫が大八洲全体を統合支配すべきだという高天原の決定に従って、磐余彦大王が東征して都を高千穂宮から大和橿原に移したことになっているけれど、それは元の伝承とはまったく違っているよということでしょう。第一天照大神の直系は饒速日神なんだし、磐余彦は月讀命の孫である邇邇藝命の曾孫なんだから。

元の伝承では筑紫の日向の豪族が筑紫（九州）では王位につけないので、浪速に東征して政権を樹立しよう、丁度うまい具合に河内大和の饒速日王国は百年来の高天原・海原・筑紫倭国連合の仇敵らしい、なんでも武御雷軍が大国主命を斃して、親の仇をとってやったのに、その親の仇の生き残り兵と結託して武御雷軍を撃退したらしい。そんな人の道理を弁えない連中は倒してもいいんだ。こういう考えだったということですね。

や すい:まあ、そういうことだな。紀元110年には饒速日大王は退位して、磐余彦に恭順し、大和政権は樹立されていただろう。実はこれは最初に言ったように「日本国」の建国ではなかった。饒速日王国こそ、天照大神の直系だから日ノ本の国つまり「日本国」だったわけで、それを筑紫倭国という「夜の食国」の出身者である磐余彦が侵略して倒し、「月本国」を建てたわけだ。それなのに２月11日の磐余彦大王の即位を記念する日を「日本国」の「建国記念の日」にしているのは大間違いなんだ。

絵里:そんなこと言うとネトウヨに反日的だと攻撃されない？

弘嗣:そうかもしれないね、戦前だと治安維持法違反だし、右翼から命を狙われたかも。しかし冷静に考えれば太陽神の国が日本だから、磐余彦の作ったのは日本じゃない、月本だということで、２月11日が建国記念日という方が反日的だということになる。

やすい:いや別に政治的な狙いがあって「建国記念の日」より「亡国記念の日」の方が相応しいと言っているんじゃないだよ。記紀の矛盾を精査して、そこから皇祖神の差し替えという史実が浮かび上がって来たので、学問的に論じているだけだから、それが間違っているというなら、きちんと学問的に論破してくれれば、納得できればいつでも取り下げるのだから。